いるのであろう．つまり，この招くことこそがベトナム人の重要な社交方法になっている．家は，ベトナム人にとって社交性を促す大事な場所なのである．

ドナを葬る

溝　内　克　之*

「ドナが，別の世界に行ったよ」

午前4時．その電話を受けたのは，調査村から近い街の安ホテル．電話をかけてきたのは，村でお世話になっている家族の「お父さん」アロボ．ドナの兄弟だ．その電話が，「ドナが死んだ」という連絡であることを理解することは，容易ではなかった．ほんの数週間前に，ドナの婚約者の実家へアロボや長老たちと一緒に結婚の許しを乞いに行ったばかりだったからだ．その時には，ドナが特に大きな病気を患っているようにはみえなかった．小学校で教師をしているドナは，「お前の仕事はどうだい？」と私の調査の進捗をいつも気にかけ，ご自慢のホンダのバイクでいろいろな場所に連れて行ってくれた．私を家族の一員のように接してくれた「お父さん」のひとりだった．

数十分後に病院にたどり着くと，アロボが「冗談みたいだな」と言って迎えてくれた．付き添いのアロボを除くと，私が最初に駆けつけた「家族」だった．アロボによると，数日前，体調を崩したドナは村の近くの病院に運び込まれ治療を受けたが，容態が悪化．昨晩，街の大きな病院に移されたものの治療の甲斐なく，あっという間に亡くなったという．街の病院へと移る時には，婚約者と正式な結婚に先だって生まれた赤ちゃんに，ドナ本人が「心配するな．大丈夫」と話したという．誰も予想しなかった死だった．私も「まさか今回の調査がドナの死によって締めくくられるとは…」と困惑するしかなかった．

村住まいの調査．それは，ただ決まった質問をするだけではなく，自らの体を使って村の人々の生活を学ぶ過程でもある．酒場で地酒を飲み，村の生活にとって酒とはなにかを学ぶ．バケツで近隣の世帯に水をもらいに行き，近所づきあいを知る．しかし，実際に自らが体験できないことも多い．当然のことだが「死」もそのうちのひとつだ．「死」は，調査者だけではなく，すべての人に体験し誰かに伝えることを許さない．だからこそ，人々は「死」とどのように向き合うかに

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

苦心し，さまざまな葬り方を編み出してきたのかもしれない．「どのように『死』と向き合っているのだろうか？」ここ数年，そんなことを考えながらキリマンジャロ山間部の村々を生活の場もしくは故郷とするチャガ人 *Chagga* と付き合ってきた．

チャガ人は，19 世紀末に植民地化とともに持ち込まれた換金作物のコーヒーを，早くも 20 世紀初頭に栽培し始めた人々として知られている．また彼らは，都市で活躍する人々としてもよく知られている．コーヒー販売から得られた現金を，学校教育や商業活動に積極的に投資したチャガ人は，早くから都市部に進出を果たしてきた．その結果，政府役人や教師などのフォーマルな職に就く者や商売で成功する者を多く輩出してきた．近年，村に現金をもたらしたコーヒー生産は低迷しているが，積極的な都市への移動は継続している．調査村では，小・中学生が卒業する 12 月ごろになると他地域での進学や就職のために，村に残る家族に見送られながらバスに乗り込む子どもたちの姿を頻繁に見ることができる．都市への移動には，キリマンジャロ山間部における土地の不足という背景もある．調査村の各世帯の耕地の平均面積は約 0.24 ヘクタールでしかなく「この庭のような畑だけでは生きていけない」と多くの村人が語る．

写真 1　キリマンジャロ山

都市への移動を人生のサイクルに織り込んできたチャガ人は，家族・兄弟姉妹が各地に散らばって暮らしていることが当り前だ．したがって，日常的に電話などでのやり取りはあるものの，一堂に会する機会はどうしても稀になる．このような状況では，誰かの死が家族・親族の関係を再確認する機会となってしまう．

調査地で初めて参列した葬儀は，イギリス留学中に客死した若者の葬式だった．村を離れ，タンザニア国内外の都市で働く親族がお金を出し合い，イギリスから遺体を村まで持ち帰った．遺体の収容と搬送に骨を折ったのはドイツで働く故人の父方叔父だった．タンザニアの首座都市ダルエスサラームに暮らす父親や近親者たちは，親族・姻族，同郷者などからの寄付を募り遺体の受け入れの準備をしたという．村に暮らす親族たちはキリスト教式のミサやそれと並行して行なわれる儀礼の準備，葬式に参列するために村に帰省する人々の受け入れの準備などをしていた．葬式には多くの家族，親族，姻族，友人知人が駆けつけ，村・都市へと広がる家族・親族の関係が目にみえた出来事だった．

その後も多くの葬式に顔を出した．葬式のために多くの人が帰省し，日ごろ静かな村が活気あふれる村のようにみえる．葬式は，平時バラバラに暮らす家族・親族・友人たちの

交流の場となり，厳粛な雰囲気を残しながらも，どこか再会を楽しむ雰囲気に包まれる．

アフリカの多くの地域で共通していることだが，調査村でも死後，母村に埋葬されることが好ましいとされている．高学歴のエリートであろうが，零細露天商であろうが，多くのチャガ人が「村で埋葬されなければならない」と述べる．しかし，村で埋葬されるにはさまざまな苦労が伴う．まず母村の土地を確保する必要がある．都市に埋没し，母村の家族や親族との関係を切っていれば，死後の埋葬地となる土地の相続を父親に拒否されるかもしれない．そのような事態を避けるためには，村に足跡を残しておく必要がある．そのひとつの方法が，村に家屋を建設することだ．どんな家でも良いというわけではない．生前の成功に見合った投資を村の土地にしておかなければならない．そのために，成功者は競うように瀟洒な家屋を母村に建設しているようにもみえる．たとえば調査村の一地区で 2006 年から 2010 年の間に新築もしくは増築されたコンクリート壁の家屋 41 棟のうち，都市在住者によって建設されたものは 34 棟であった．村には，所有者が住まない瀟洒な家屋が増えている．それらの家の持ち主たちは「墓を建てた」と語り，村の老人は「お前が今度調査に来るときは，われわれ老人は死に，村に家と墓が残るだけだな」と，私に語るほどである．

さて，最初に葬式に参列させてもらって以降，多くの葬式にお邪魔し，裏方の作業や親族集団が執り行なう儀礼を観察させてもらった．「故人はどんな人でしたか？」「なぜ埋葬するときに，遺体の頭を山側に置くの？」「だれが都市から遺体を運ぶ費用を集めたの？」など，とにかくなんでも質問し，観察した．村の人たちは「変な日本人だ」と思っていたかもしれないが，おおらかに質問に答えてくれ，埋葬や儀礼の様子を観察させてくれた．多くの葬式に参加し，質問し，写真をとり，儀礼のやり方や道具などの名前をノートに記した．いつしか，なんとなく葬式の手続き，家族や親族の関り方をわかった気になっていた．そんなときに村の「家族」のひとり，ドナの死に突然直面したのだった．

ドナがこの世を去った病院に私が到着して

写真 2　都市在住者によって建設された家屋のひとつ

写真 3　棺を運ぶ兄弟や同僚の小学校教師たち

からしばらくして，夜が明けた．街に暮らす親族も駆けつけ，今後の事が話し合われた．「病院の手続きは？」「遠方の親族，姻族，ご近所や教会へ連絡は？」ホッとする時間もない．「だれが婚約者に伝えるのか？」も話し合われた．彼女はドナの死をまだ知らなかった．病院の手続き，遺体の搬送などを街に暮らす親族に任せ，アロボと村行きのバスに乗り込む．村の家族に訃報を伝え，葬式の準備を始めなければならない．アロボの電話には何度もドナの婚約者から電話がかかってきた．アロボも私もその電話にどのように応えればいいのか思いもつかなかった．村までの 1 時間半を 2 人して無言のまま過ごした．

アロボの家に着くと，アロボの奥さんが迎え入れてくれた．「残念」とつぶやく彼女．いつもの笑顔はない．家には親族の長老 2 人が待っていた．無言で握手を交わし，長椅子に座った．「ドナが…」といったアロボは涙でそれ以上なにも話せなくなり，老人たちも「泣くな，悲しみが深くなる」と言いながら涙を流した．私も涙が止まらなかった．降り始めた雨が肩にかかったが，だれも気にせず，さめざめと泣いた．

その後，都市から多くの親族が帰省し，酒を飲みながら近況を伝えあい，昔話に花が咲いた．淡々というよりは，どちらかというとドタバタと葬式の準備がすすめられた．私が知っている活気ある雰囲気に戻った．そしてドナは多くの親族・近隣者，そして小学校の教え子たちに見守られながら埋葬された．

わかったような気になっていた葬る作業．淡々と，時に明るい雰囲気の中で進められる，

写真 4　ドナの葬式のために帰省した親族たち

その作業．その裏に，当然存在する悲しみのことを私は忘れていたのかもしれない．アロボと長老たちの涙に触れ，私自身も「家族」の一員として「死」と向き合ったとき，思い知らされた．いつも明るくふるまう彼らも涙を流し，落ち込み，不安を抱えていた．私はなにもわかっていなかったのかもしれない．

私にとっても大きな喪失感だった．近づいている帰国までの時間を，ドナのお葬式の調査にあてることに決めたものの，ノートをとる気にもなれずにいた．そんな私に声をかけてくれたのは，村の家族のひとりだった．

「ヨシ，お前の友達ドナは行ってしまった．ほら，お前の仕事はノートをとることだろ．ドナのために葬式の写真もたくさんとってくれよ．」村の人に助けてもらった．私は，ドナの葬式の記録係としていつもより積極的に写真を撮影し，そしてノートをとった．私の調査を応援してくれていたドナを私なりに葬るために．

（本稿は，筆者が所属する NPO 法人アフリック・アフリカのホームページに掲載したエッセイを，大幅に加筆，修正したものである．）